

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前： Alejandro Hernández Bolaños
(アレハンドロ・エルナンデス・ボラーニョス)
(コスタリカ)
- (2) 年 齢： 28 歳
- (3) 参加事業： 次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」参加青年
(※SWY29 相当) (2016 年度)
- (4) 職 業： 在コスタリカ、ホンジュラス、ニカラグア カナダ大使館
広報担当官



■ 参加のきっかけ

私が次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(以下「世界船」という。)に応募したのは、ちょうど大学(政治学専攻)で卒業論文を提出し、学位を取得する手前のタイミングでした。またリサーチ・コンサルタントとしても働いており、国の年次報告となる「State of the Nation」で政治分野に関わっていました。世界船のことは、友人が教えてくれたのですが、ちょうどコスタリカ青年協議会が、日本大使館からの依頼を受け Facebook で告知をしていたのです。私が参加した際に、応募者は 3,000 人以上だったと聞いています。青年 11 名とナショナル・リーダー 1 名が選ばれるわけですから、大変狭き門でした。まず筆記試験があり、英語とスペイン語での面接、そしてもう一度筆記試験と英語試験があり、最後にグループ討論の場と、大使館での面接がありました。選ばれるのは大変なことでしたが、これだけでもリーダーシップを磨く経験になったと思います。

世界船に応募したのは、たとえ何マイル離れていようと、私たち世界の若者が抱える問題は同じであり、若者は社会の「現在」ばかりではなく「未来」としても語られますが、その社会で成長するためには同じ課題に直面している、いつも心でそう思っていたからです。そして、私の仲間たちが、どのように世界を一步步変えていくのかを直接体験し、生活し、学び、聞きたいと思ったからです。

■ 地球市民として共通課題を話す

私は、同期の青年たちの「抵抗」の物語、「脆弱さ(傷つきやすさ)」の物語、そして「勤勉」の物語に刺激を受け、この事業への期待が満たされたどころか、はるかに期待を超える経験をしました。特に、ニュージーランドの青年は、先住民の土地を守るために行動を起こしており、その話を聞いて先住民が置かれた厳しい現実について知り、心動かされました。コスタリカも「世界で最も平和な国」と形容されることがありますが、都市部はともかく、沿岸部や地方では課題が山積んでいます。それを隠したりせず、話すことができました。なぜ話せたかと言うと、船上では違った文化や相手を深く知っていく中で、ある日突然、「**多様性が標準(スタンダード)になる**」のです。これは美しい瞬間で、誰もが心を開き、たまには落ち込んだり、たまには恋をしたりしながら、そうやって「地球市民であること」を尊び、自ら実践していきます。地球上には**共通の課題もあり、私たちは違いを超えて、団結し、協力することができる**のです。安心で安全な環境を作るには、いくつかの段階がありますが、まずは個々人が「他者への好奇心を持つ」こと、次に「違いを当たり前と思う」ことをベースに、理解してつながっていくことです。

世界船の旅を通して、数週間前には見知らぬ人だった友人たちを心から好きになり、感謝することを学び、また、**自身と、自分がどのようなリーダーであるか、そしてどのようなリーダーになりたいかについて、多くを学ぶことができました。**リーダーシップや異文化理解は、どんな分野においても重要だと思いますが、特に私の外交や政治の分野においては特に重要と言えます。他者の課題やニーズを理解するキャパシティ、そして「アクティブ・リスニング」と「アサーティブ・コミュニケーション」が必要だからです。「正しさを強調する」というのは、あまり良い解決策ではなく、話し合って「新しいルールを作る」ということが求められたりします。「自分がしてもらいたいように、他者に接する」という諺がありますが、「青年のエンパワメント」コースでは、「自分も他人も、それぞれがどう扱われたいかの定義に基づいて、相手に接する」という一歩上のルールを設け、そこから信頼関係と友情を築いていきました。

■レター・グループで生かした交渉力

特にキャリアに生かされたこととして、以下が挙げられます。

- 異文化コミュニケーション／異文化理解を実践する
- レターグループ活動などで交渉力をつける
- リーダーシップとは常に最前列で引っ張ることではなく、時には他者を助けたり、一緒に歩んだりすることで、より良い貢献ができることを理解する
- 他者の努力や能力を認め、より良い関係性を築ける
- 一緒に時間を過ごすことが、自信と信頼を育む鍵である

交渉力については「代替的紛争解決（alternative dispute resolution）」という方法がありますが、船の生活においては身近なレベルで起こっていました。エピソードとして、日本文化では時間厳守というのが大切にされ、朝の点呼でドルフィン・ホールに最初に集まったレター・グループが、写真を撮ってもらえ、表彰を受けていました。私のFグループでは、いつも遅れてしまう青年がいたので、この表彰を受けることができず、私はアシスタント・グループ・リーダーでしたので、他のアシスタント・グループ・リーダー2名と話し合いをし、どうしたら時間通りに集まれるかを考えました。その遅れがちな青年に、「一度だけでいいから、試しに、10分前に集合してみようよ」と持ちかけました。そして本人も、「一回だけなら」とまんざらでもない気持ちで、なんと、ある日に一番早く集まったグループとして表彰を受けることができたのです。私たちはグループ全体で大興奮し、管理部の方々も喜んでくれました。そのように交渉力を発揮し、一緒に達成できた喜びを、鮮明に覚えています。

■自分らしくいられて、人の優しさを感じる瞬間

レター・グループの活動は、自分にとってとても影響があったと考えます。自分より大きな集団に属しているという感覚はとてもパワフルで、いろいろな国の人たちと家族のように過ごしている感じは、とても刺激になりました。レター・グループは居心地の良い空間で、みえを張ったり「仮面」を被ったりするような必要はなく、「私がより自分らしく」居られるようになりました。また、**出身国や経歴、言語の習得度に関係なく、人々の優しさを再認識することができました。**

レター・グループでの出来事について2つの事例を共有します。1つは私がレター・グループでの東京観光で集合時間に遅れてしまったのですが、私が遅刻したことに、きっとストレスや不安を抱えながら待ち続けていたにもかかわらず、ある日本青年が、到着した私に「荷物持とうか」と声をかけてくれたのです。このホスピタリティに私は感銘を受けました。日本はどちらかと言えば時間厳守の国ですが、「誰かが遅れていたら、待ってもいい」という価値観も持ち合わせているのが印象的でした。

もう一つの出来事は、何かのコースで、とても難しい質問が出された時です。確か「人生のゴールとは何か」のようなお題で、ペアで頭のエクササイズをすることになりました。ペアを組んだ日本青年は、「私は分からないから、あなたから始めて」と言ったので、私から共有することになり、自分が抱えている役割、つまりいい兄弟や息子や恋人でいること、いいミュージシャンやいい政治活動家でいることなど、今の自分とは「違うバージョンの自分」をいくつかを伝えました。自分が自然と思ったとおりに伝えてみたところ、彼女の目から涙がこぼれ、感動して泣いているのだと聞き驚きました。その時に自分が誰かに影響を与えることができるのだと感じて、自分も感動を覚えました。そのときに「ハグをしていいですか？」と尋ねてから、ハグをしたことを、いまでも覚えています。

■ 世界船独特の環境で、新しいルールを作る

私は世界船のように特徴ある事業を見たことがありません。世界船は、永く続く友情とネットワークを育むと同時に、自分自身の新たな側面を発見し、普通だと思っていた現実社会に挑戦できるすばらしいプラットフォームです。**自分が「ルール」だと思っていたことが、新しく出会った友人には当てはまらない、そしてそれは悪いことではないと分かり、世界がいかに大きく、多様で、美しいかを実感し始めるのです。**例えば身体的接触がそうですが、ラテンアメリカ社会では、恋人同士でなくても挨拶でハグやキスをします。日本のように、ハグをしない国もありますので、ではハグをしないとしたら、どうやって身体的接触をせずに自分の友愛の気持ちを伝えるか、ということを考えました。先ほどのように、「ハグをしていいですか？」と相手の許可を取ってからハグするというのもありましたし、話し合ってお互いのルールを決めていくことになります。別の国では、ラテンアメリカ以上に身体的接触があったことも驚きで、私は「不快だから触らないでほしい」と伝えた時もありました。もちろん、お互いの文化を事前に勉強するということも助けになると思います。コスタリカ代表団は、毎週末に事前準備のため集まり、全参加国について勉強することを、6か月続けました。

このように私の経験を振り返ると、世界船は「**人と人との交流を促進するための集中的な空間**」と言えます。違った考えや背景、大陸に住む人々が集まり、世界で最も大切な学びに辿り着きます。それは、愛情やコミュニケーションであり、私たちが信じる平和な世界の実現のためには、障壁や国境といった考え方も問いかけるべき、挑戦すべきということです。

■ リーダーシップは内側から発せられるもの

世界船に参加する前は、グローバルに活躍することが自分の目標であるとはっきり自覚していたものの、その方向に進み始めるには十分な経験も自信もありませんでした。しかし、参加してみて、**自分を信じるのが一番であり、それがリーダーシップの基礎になる**ことが分かりました。リーダーシップは内面から生まれるもので、そこからコミュニケーション、理解、他者への思いやりといった領域で自分自身を投影していくものです。自分を信じること、たとえ英語が母国語でなくても、自分の考えを相手に伝えるためにベストを尽くすこと、そして特に、自分以外の何かにならなくては、と思わなくていいような安心・安全な空間の創造で得られる力を大切にすること、これらはすべて世界船によって、私の中で鍛えられ、最大化されたものです。これぞリーダーシップと異文化理解の最高峰であり、この事業が私に与えてくれた贈り物なのです。

■ 日本の印象

参加以前は、日本は非常に優秀で近代的な国でありながら、孤立していて、他の伝統や行動様式をあまり積極的に受け入れていないように見えました。しかし、実際日本の人々に会うことで、私の考えは変わりました。世界を魅了するものを作り上げる人たちや、特に新しい世代、伝統的な日本と、世界のハイパーコネクテッドなトレンドを融合させている

人々に出会ったからです。彼らは、他国の影響を受け入れつつ、自国の価値観に忠実であることが可能だと教えてくれました。例えば、お好み焼きを食べながら、一步外を歩けばアメリカ産の炭酸ソーダに出くわします。

私はこれまで自分のことを「西洋人」だと思っていた、東洋（もちろん日本が主な情報元となっている）のアニメや映画、音楽にはあまり影響を受けていませんでした。しかし、世界船に参加し、私がスーツを着ている人に「優雅だ」と感心する気持ちは、日本で着物を正しく着こなす男女にも同じく感じるようになりましたし、コスタリカ人のコーヒーへの愛情は、日本人が抹茶をこよなく愛しているのと共通していると知りました。そして日本も、中南米にいる私たちと同じように、伝統を誇りにしていると知り、日本に対するこれまでの考えすべてが変わったのです。伝統はその国の人々や核となる価値観を物語っています。日本のおもてなしの心や独自性、社会の一体感といった価値観を心から敬服し、日本の伝統が社会そのものにどのような意味を持つのか、また、日本社会にどう反映されているのか注目するようになりました。



日本国大使館イベントでは茶道を披露

■ 寄港地活動での地元の人との交流

船内活動では、PYセミナーが私にとってその後のキャリアに大きな影響を与えました。仲間から刺激を受け、新しいスキルや情報を学び、これまで知らなかった世界の現実を深く知り、青年として直面する課題や国が共有する利益について理解を深めることができたのです。

寄港地活動では、フィジーの国会を訪問したことが強く印象に残っております。他の国や地域で政治がどのように機能しているか、また**多くの場面で儀礼や伝統がいかに重要であるかを観察する機会**となりました。私にとって、他国で政治システムがどう機能するかを見るよい機会、青年がどのような機関においてどう支援されているかを知る機会でした。そして、好奇心を持ち、とても謙虚になれたと思います。フィジーでは国立スタジアムへ行き、観衆の前で踊りを披露することがあり

ました。コスタリカのきらびやかな衣装で、自分がスターと思えるように気持ちを盛り上げていくと同時に、地元の人と交流でき、コスタリカにとって踊りがどういう意味を持つか伝える有難さも感じ、謙虚な気持ちを持ちました。私は「青年のエンパワメント」コースに所属していましたが、より「前に出るリーダー」として積極的に質問をし、コースの仲間の関心を高めるなどが、できたと思います。

船を交流に使用することは非常に独創的なアイデアであり、異文化理解、リーダーシップスキルの向上、そして**自国の若き大使として「大海を航海する」**という表現が比喻としてもびったり来ます。私個人としては、船酔いや、家族、友人、ホームシックに対して、レジリエンス（回復力）を養う効果もありました。また、世界中の人々と、**永きにわたる新しい友情とサポート・システムを築く絶好の機会**とも言えます。

■リーダーとして社会に還元していく

現在私は、世界青年の船事後活動組織（SWYAA）コスタリカの代表を務めています。私はコスタリカの既参加青年の中では若輩者ですが、事後活動組織の副会長を務めていましたし、日本国大使館での勤務と文化ウィークの運営経験があり、「SWY + 1」やボランティア活動に積極的だったこともあり、私に務めることができると仲間に信頼してもらって会長職に就きました。組織活性化のため、ソーシャル活動、バーチャル活動、ボランティア体験、ソーシャルメディアへの注力など、新しい活動を始めたり、アイデアを練ったりしています。コスタリカでは既参加青年が比較的近くに住んでいるので、パンデミック前は直接会うことが中心でしたが、パンデミック後はバーチャルでの総会を行いました。私はこれまでに、地域の清掃活動、国際 NGO との国立公園の共同清掃活動、「SWY+1」、「SWY Wave」、寄港地であったエンセナーダへの訪問、青年省副大臣との茶道体験、在コスタリカ日本国大使館との日本文化ウィークでのコラボレーションなど、様々なボランティア活動を行いました。世界船に参加して、私は**人生の中で多くの機会を与えられていることに気づき、そしてリーダーとしての責任を果たし願望を叶えるには、どんな手段であれ社会に還元することだ、と気づきました**。また、世界船に参加して、多くの若いリーダーたちがいて、私たちは**自らが住みたい社会を築くための「レンガ」を一緒に積み上げていく機会があるのだと、刺激を受けました**。世界船の後、私は自分を「地球市民の一人」と位置づけ、自分の力を信じて、私の活動によって私のコミュニティが変わることで、世界に影響を与えられると思いました。



SWYAA と国際 NGO Raleigh Association との共同で、国立公園清掃活動

国内外の事後活動組織ネットワークにおいて、どのようなコミュニケーションがありますか。

事後活動組織会長として、コスタリカの同期の既参加青年だけでなく、他の参加回の既参加青年とも連絡を取り合っています。また、海外の青年たちとも良い関係を保っています。いくつか例を挙げると、世界船参加直後の2017年にチェコ共和国プラハを訪ね、ウクライナ青年と会い、旅行者である私たちを案内してもらいました。また、エジプト青年や日本青年とは定期的にビデオ通話をしています。ここコスタリカでは、日本青年を迎え入れることができました。そしてちょうどパンデミックが世界的に流行する直前でしたが、アメリカ大陸最後の寄港地であったエンセナダ（2020年）で、パンデミックが世界を襲う直前に、親友である日本青年と再会することができました。



プラハでウクライナ青年と再会（筆者左）

事後活動で素晴らしいと思うのは、世界船ネットワークの幅広さです。外交官もいれば政治家もいる、そして民間企業に働く人も多くいます。もちろん「戦略的に」（計算して）仲良くなることもできますが、私たちは大抵「よき友人」として仲良くなり、自分の経験を話したり、アドバイスを求めあつたりします。つまり、**世界船の延長**がここにあるのです。

アレハンドロ・エルナンデス・ボラーニョス氏 プロフィール

2017年、次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」に参加後、外交と政治に専門性を持ち、これまで日本国大使館、カナダ大使館での業務経験を持つ。日本国大使館では政治部アシスタントとして、日本からの新型コロナウイルス対策寄付金を医療分野で活用、またコスタリカ全土で日本文化の普及をし、茶道を披露した様子は国営テレビに放映された。カナダ大使館では人権や民主主義と言った得意分野を生かし、インターネットの民主的利用など、市民への教育にも携わる。国際協力、国と国との良好な関係の基盤には、人と人をつなげる力が大きいと実感し、外交や国際分野でのキャリアを積みつつ、自身の経験を生かした社会貢献を続ける。現在、世界青年の船事後活動組織コスタリカ会長。